『総合人間学研究』第 11 号 2017 年 5 月

Ⅳ 一般研究論文

IV Articles

心の傷の時代における芸術の再解釈 ージョルジュ・ルオーを例に一 Reinterpretation of Art in the Era of Mental Trauma: The Example of Georges Rouault

高橋 在也 TAKAHASHI, Zaiya

1.「心の傷の時代」という問題設定

精神科医の宮地尚子は、暴力的出来事を被った人物と、その人物が生き抜いてその出来事について語る際に生じる構造を、「環状島」というモデルを使って次のようにまとめた。

「環状島」は、内側に「内海」があり、その周囲を環状の島が囲い、島の外側に「外界」が広がる世界である。破壊的なほどの暴力的出来事を被った人物は、「内海」に沈められる。「外界」の部分は、いわば外の「常識的」な世界にあたる。その出来事を生き抜いた当事者(生存者)がなんとか声を出し、語ろうとする時、その人は「内海」からなんとか這い出し、環状島の「尾根の内斜面」にいる。足を踏み外せば「内海」に転げ落ちる斜面である。しかし、それは「内斜面」からの声なので、無関心な非当事者の「外海」には聞こえなかったり、無視されたりする。非当事者のうち、当事者を支援したいと望む人物は、島の外側の急斜面である「外斜面」に足を

ふんばって、反対の尾根の声を聞こうとする。しかし、声は聞き取りづらい(宮地 2007:10-11)。

宮地の図式は、破壊的・暴力的出来事のサバイバ 一の声が、いかに常識的な世界から隔絶されている かを表している。1990年代,レヴィナス,デリダ, S.フェルマンの理論を借りて、ホロコーストやジェ ノサイドといった政治的・社会的暴力を生き残った 人の声を「理解」することがいかに困難で、かつ 我々の世界の理解そして変化のためにいかに必要か が議論された(高橋1995, 岡2000)。宮地は、こ うした「生き残った人の声の理解」の困難性と必要 性の議論を、「トラウマ」の問題、つまり心の傷の サイドが起こったわけではない日本において、精神 的・社会的暴力を生き残りなお苦しんでいる人がい かに多く、その声を「理解」することがいかに困難 で、かつ我々の世界の理解そして変化のためにいか に必要かという認識がある。

長期刑受刑施設(刑務所)の受刑者就労支援カウンセラーである河角恵子は、暴力行為の加害者である受刑者は、しばしば「社会経験のある市民の多くが少なからず体験している」であろう「社会的立場・や役割を越えて信頼し、励まし合い、沸き起こる感情を共有し、自分の思考を深めるきっかけとなるような人としての対話」(河角 2015:175、傍点高橋)という経験を、長期間あるいは人生でほぼ経験できなかった背景があるという。そうした場合、社会における自己の存在意義を見失い孤立し、その孤立を回復する手段として暴力的コミュニケーションや自傷を選択するという。

ところでその「孤立」の深刻さを説明するために、 河角は、エーリッヒ・フロムの次の文章を引いてい る。「人間のもっとも強い欲求とは、孤立

(separatedness)を克服し、孤立の牢獄(prison of his aloneness)から抜け出したいという欲求である。この目的の達成に全面的に失敗したら、発狂するほかない。」(フロム 1991:25)河角の提起する、「社会的立場や役割を越えた信頼・励まし合い」を奪われ「孤立」してきた受刑者像は、日本社会における「受刑者」という特殊な事例というよりも、

(発狂するほどの深刻さをもつ)孤立を経て暴力または自傷を選択する人物像という点で,現代の日本社会におけるひとつの典型的人物像ではないだろうか。

「心の傷の時代」とは、こうした「孤立」が典型経験となるような時代を指す。本稿は、いまだ「支援」が届かない、宮地のいう「内斜面」で生き延びる人物(=無力な人)が持つ「力」と、「内斜面」で生き延びる孤立した人物にとって芸術がもつ意味を、20世紀の画家ジョルジュ・ルオーの絵画作品

と作家アンドレ・シュアレスとの往復書簡から論じる。そこから、「心の傷の時代」において芸術がなぜ必要か、その時美はどのように定義されうるかを 提起する。

2. G.ルオーと A.シュアレスの往復書簡

ジョルジュ・ルオー (1871 - 1958) は、前半生には娼婦や道化師を「醜悪」に描く画風ゆえに「闇の画家」と評され、その後半生においてイエスの人生を題材に暖かく明るい画風へと変化していったという評価が定着している。またこうした画風の変化の契機として、詩人アンドレ・シュアレス

(1868 - 1948) との交流(往復書簡)がしばしば 言及されている(後述する)。

ごく簡単にではあるが、画風の「変化」を概観しよう。図1「風景」は、ルオーの最初期の水彩画である。図2はレオン・ブロワ(1846 - 1917)の著作『貧しき女』の挿絵として描かれたもの。ルオーは1903年からパリのサロン・ドートンヌに、水彩画による娼婦、道化師、ブルジョワを多く描き、

「それは多くの人々の嘲笑を買うと同時に少数の理解者を得た」(柳 1972:87) という。



図 1:「風景」(右 1900 年)

『総合人間学研究』第 11 号 2017 年 5 月



図 2:「プロ夫妻」(左 1905 年),「鏡の前の娼婦」(右 1906 年)

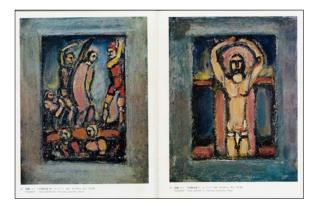


図 5:『受難』より「十字架の道Ⅲ」(左 1939 年),「十字 架の道Ⅰ」(右 1939 年)

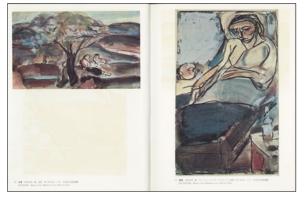


図 3: 「風景 (左 1912 年頃)」, 「陋屋」 (右 1913 年頃)

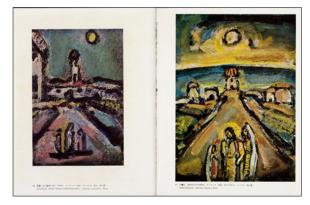


図 6: 「三人物のいる風景」(左 1935 年), 「夕暮れ」(右 1937 - 8年)



図 4:「傷ついた道化師」(左 1932 年),「小さな家族」(右 1932 年)

図3のような印象の水彩画を経過し、図4(油彩)のように道化師を題材にしつつそれを「醜悪」に描くのではなくどこか内面の傷とその癒しを想像させる印象を与える作風へと変化する。同時に、イエスの受難を題材とした図5(油彩)のような連作が現れ、晩年は図6(油彩)のように黄色を基調とした人物のいる風景画へと移行する。人物はイエスを描いているとされるが、宗教的救世主としてのイエスではなく、民衆と共にあるイエスとして描かれ、時にはイエスかどうかもはや判然としない作品も多い(図6の左はそうである)。

こうした画風の変化に、ベルナール・ドリヴァル

は「第一期:ペシミズムと怒り、第二期:厳しさ、第三期:平和、第四期:歓喜」という区分を与えているが(ドリヴァル1961:155)、そうした区分に対しては、「とくに第1次世界大戦以降の作品には、非常な幅と深さが加わっており、概念的説明を容易に受け付けぬ」(柳1965:24)、「一生かかって一点に専心する人間」として画家ルオーを見るとき画風の変化のみで区分するのはその「一点」を見失いがちとなり「危険な分類である」(高田1965:99)と保留がつけられている。とはいえ、今ここにわずか6枚の図で眺めてきたように、われわれの受ける印象で、1912年頃を境にその「画風」は大きく舵をきり、冒頭に述べたような「明るさ」への変化を認めることができる。

では、その契機にアンドレ・シュアレスという人物はどのように影響をもたらしていたのか。

ルオーはシュアレスに宛てた最初の手紙において, このように打ち明けている。

「私は心の奥に苦悩と限りない憂愁を抱えて(un fond de douleur et de mélancolie infinie)います。 生活するにつれてそれは絶えず強まっていくのです。 もし神の許しがあれば、私の絵は、非常に不完全な がらも、この苦悩や憂愁の表現となり開花するしか ないのでしょう。」(1911 年 7 月 16 日)⁽¹⁾

それに対して、シュアレスはおよそ3年間にわ たって応答をし続ける。

「君の中には深い矛盾がある。…君は生来の使命を果たしていないと私は思う。君の迷いも苦しみもそこから来るのだ。否定の精神(l'esprit de négation)が君を迫害しているのだ。」(1911 年 12 月 19 日)

「親愛なるルオーよ、私は君を否定から癒してあげ

たいのだ。他人と対立するよりは、君自身と君の理想のために生きてほしい。否定するため、戦うために費やされた時間は、失われた時間なのだ。」

(1912年9月1日)(3)

「君は復讐の潰瘍を取り除かなければならない。人生が君の中に注ぎ込んだどす黒い液体を何としても吐き出してしまわねばならない。何故か――なぜなら、この液体は、君の魂のすべてではないからだ。」(1913年2月8日)⁽⁴⁾

この 1913 年 2 月の手紙で、シュアレスは、心の無い都会の過酷なみじめさ(les cruelles misères de la Cité sans coeur)が君に絶望の精神を植え付けたとしても、その絶望の表現が君の生来の使命ではないと応え、次のように書く。

「自分の内なる悪をすべて掴み出す勇気, それに耐える力, それらを必要とすることは真実だ。しかし, その悪から自分を解放しないでいることは, 生きることではない。芸術家というものは, 苦悩の世界に愛の最も美しい形を与えることによってその世界を苦悩から救うものだ。」(1913年2月8日) (5)

こうしたシュアレスからの呼びかけがルオーに与えた影響の大きさを、ルオーの友人たちや研究者たちが証言している。シュアレスはルオーをその「生来」の作風に導き、「彼が自覚するのを、完成するのを助けた」(アルラン 1971:17)。あるいは、ルオーが娼婦や道化師、醜悪なブルジョアを描き出すことで、「カトリック信者が宗教画を描かなくなったルオーを見離したとき、そして美術批評家たちが文学性を盛りすぎてルオーを「説明」しようとしたとき、このルオーの本質をもっとも敏感に、もっとも素直に感じて、友達となり、そして最初にルオーを世間に向って弁護したのがアンドレ・シュアレス

であった」(高田 1965:81-82)。そして、こうしたシュアレスの視点は「透視者的な深さと予言者的な鋭さ」をもって「それからなお半世紀近くも続くルオーの芸術を完全に予言するものであった」(柳1972:93)。これらの論者たちは、ルオーの理解者・弁護者・そしてその本質の透視者としてのシュアレスを共通して強調している⁽⁶⁾。シュアレスの影響について、こと創作活動に関してはより限定的に位置付ける論者もいる⁽⁷⁾。しかし少なくとも、シュアレスの投げかけは、ひとりの表現者にとっては重みのある救いであったであろうことは推測される⁽⁸⁾。

3. 悪の恐ろしさで美を創る

問題は、同じ日付の書簡の中で、シュアレスが次のように書いていることである。「私たちが芸術家であればあるほど、私たちは、悪の恐ろしさそのもので美を創らなければならない。」(1913年2月8日)

この意味は単純には理解できない。前後の文脈と共に引用する。

「私たちはまず,自分自身を救わねばならない。苦 しむことを拒絶しないことでそれができる。これが 第一の時期だ。

第二の時期は、暗闇の上方に私たちを引き上げるのだ。暗闇というのは、人からもらった過度の苦痛や不正義が私たちに刻みつけた憎しみや恐ろしいほどの絶望のことだ。私たちは、否定の中では生きられない。

私たちが芸術家であればあるほど、私たちは、悪の恐ろしさそのもので美を創らなければならない。 自分の内なる悪をすべて掴み出す勇気、それに耐え る力, それらを必要とすることは真実だ。しかし, その悪から自分を解放しないでいることは, 生きることではない (…後略)。」(1913 年 2 月 8 日) (9)

本稿の関心からみると、「人からもらった苦痛や不正義によって刻みつけられた憎しみや絶望」は、「都会の過酷なみじめさ」植え付けた「絶望の精神」であり、「人生が君の中に注ぎ込んだどす黒い液体」である。こうした絶望に覆われて、声を失ったあるいは声が聞き取られない人々が、冒頭に示した「内海」に沈んでいる人々である。そして、文脈を見る限り、この「人からもらった苦痛や不正義によって刻みつけられた憎しみや絶望」(=「暗闇」)が、

「悪」という言葉と関連付けられていると思われる。 「暗闇」を生み出し、人々を発狂するほど孤立した 内海へと投げ込む仕組みに、「悪」が関連している ように思われる。

しかし、それでは「悪の恐ろしさで美を創らなければならない」とは何を示すのか?そのことが、いかなる意味で「否定」からの解放や、「生きること」の回復、さらには「愛の最も美しい形を世界に与えることによってその世界を救う」ということにつながりうるのだろうか?

4 悪とは何か:S.ヴェイユの示唆

そのためには、「悪」とは何かを掘り下げるための、補助線となる考察が必要である。そのために本稿の関心である暴力と関連づけて悪を位置付けた、哲学者シモーヌ・ヴェイユ(1909 - 43)の定義を参照する。

「人を傷つける行為は、自分の中にある堕落を他人

に転嫁すること (un transfert) である。だからこ そ,まるでそうすれば救われるかのように,そうい う行為に走りがちなのだ。

すべての犯罪は、加害者から被害者へと悪 (mal) が転嫁されることである。不義密通から殺人にいたるまで全部そうだ。

…略…悪が転嫁されるときにも、悪を生じさせた 人間において、悪は減るどころか、逆に増える。与 えれば与えるほど増えるという現象である。ものの 上に悪の転嫁が行われる場合も、同様である。

それでは、悪をどこへしまいこめばいいのか。

自分の中の不純な部分から純な部分へと悪を移し、 そうすることによって、悪を純粋な苦しみ(en souffrance pure)に変えなければならない。自分 がいだきもつ犯罪の害悪は、自分がこうむらなけれ ばならない。

だが、そうしているだけでは、自分の内部にある 純粋な一点もたちまちのうちに汚されてしまうだろ う。どんな攻撃も及ばない場所にある不変の純粋さ と接触しつつ、たえずこの一点を新たによみがえら せて行かないかぎりは。

苦しみを犯罪に転嫁しないようにするのが,忍耐 (la patience) である。ただそれだけでも,犯罪 を苦しみに変えて行くことができる。」(ヴェイユ 1995: 123 - 124)

「にせものの神は、苦しみを暴力に変える。真の神は、暴力を苦しみに変える。」(ヴェイユ 1995: 122)

ヴェイユによると、「悪 (mal)」とは、暴力を振るわれ心が傷つけられた後にその傷が回復せず、癒えぬ傷が膿んで、他者や物に暴力を再びぶつけるこ

とで増殖していくものだという。ゆえに、すべての 犯罪は、「加害者から被害者へと悪が転嫁され」、か つ悪を生じさせた側も「与えれば与えるほど増える」 という現象である。

それに対して、そうした不条理や傷を他者や物に ぶつけないことによって、それが「苦しみ

(souffrance)」に変わるが「悪」を生まないとヴェイユは述べている。

ヴェイユの主張を図式化すると,次のようになるだろう。

暴力→傷つく→傷が膿む→他者や物に再びぶつける (加害者から被害者への「悪」の転嫁。与えれば与 えるほど増える)

暴力→傷つく→他者や物にぶつけない→苦しみ (新 しい「悪」は生まない)

ヴェイユの「悪」の概念は、いじめに代表される 現代社会の暴力の連鎖のメカニズムを言い当てつつ も、その連鎖を防ぐために、完全に孤独な状況(= 「内海」あるいは「内斜面」)においても可能なひ とつの手立てを示唆している。それは、自らの中で 被った傷に耐え、それを「苦しみ」に変えるという ことである。

むろん、暴力の被害者に一番必要なのは、他者からの助けである。しかし、暴力の被害の深刻さの中核とは、「助け」がないと実感されること、あるいは端的に「助け」がないことである(完全な孤独)。 苦しみに耐えることは、悪を増殖しないかわりに、現実的には文字通りの苦痛であり、無力である。 『総合人間学研究』第 11 号 2017 年 5 月

5. 無力な人の力

しかしながら、苦しみに耐えた経験は副産物を生む。それは、苦しんでいる人がいかに孤独の中で苦痛と無力に耐えているかを理解できる(今苦しんでいる人にとっての)他者になれる、というかけがえのない価値である。

さきほどの図式を展開すれば、以下のように示せる。

暴力→傷つく→傷が膿む→他者や物に再びぶつける (加害者から被害者への「悪」の転嫁。与えれば与 えるほど増える)

暴力→傷つく→他者や物にぶつけない(耐える)

- →苦しみの経験(無力)
- = 完全に孤独な状況において可能な手立て

 $\hat{\mathbb{U}}$

無力な人にとっての理解者としての他者になる力



図7:「キリストと子供たち(町外れ)」(1931 - 39年)



図8:「キリストと子供たち」(1939年)



図9:「キリストと子供」(1939年),「キリストと漁夫たち」(1937年),「キリストと癩病人たち」(1938年)

今一度、ルオーの作品に目を転じよう。いずれも イエスを題材にしたルオーの後期作品であるが、イ エスと、イエスと一緒にいる人たちの表情と姿勢が 注目される。

ここにいるイエスは、キリスト教宗教画の伝統である光輪もなく、神的な奇跡を施すイエスではない。子ども、漁師、「らい病人」と一緒にいて、子どもを抱きしめたり、手を差し出したり、漁師や「らい病人」と一緒に背をかがめているイエスである。かれらは社会的に底辺にいる無力な人であり、イエスも社会の圧力によって死を免れなかった点で無力な

人である。

シュアレスは、「悪の恐ろしさそのもので美を創る」と書いていた。本稿の解釈は、「悪→苦しみに変換→美が生まれる」というものである。美が生まれる時、作品そのものが、無力な人にとってのまるで理解者であるような力をもつ。

ここから、シュアレスの言説における、またルオーの作品から見て取れる美の定義が導かれる。すなわち、美とは、それみずから人に近づき、弱さや傷・っきに寄り添うものである⁽¹⁰⁾。

6. おわりに

心の傷(しかも幾世代にわたって積み重なってきた心の傷(11))からの回復は、とりわけ現代日本社会においては、領域横断的な中核の社会問題である。そのために、対処療法的に手段として芸術の「効用」だけを主張するのではなく、そもそも人間は、心の傷から回復し、「否定の精神」(シュアレス)から解放され、「生来の使命」をつかむことは可能であり、その時、助け人としての人間がいない時でも、誰か人間が描いた一枚の絵画が、押し黙った「助け人」であるかのように心に呼びかけるという経験があることを主張したい。芸術は、「心の傷の時代」の中核経験であるトラウマに沈められた人物の心に呼びかける媒体として、新たに提起され直さなければならない。

注

- (1) Rouault et Suarès (1960:3), ルオーとシュアレス (1971:23)。以下, ルオーとシュアレスの往復書簡については, 富永・安藤訳を参照しつつ拙訳をもって示した。
- (2)Rouault et Suarès (1960:9), ルオーとシュアレス (1971:31)。
- (3)Rouault et Suarès (1960:28), ルオーとシュアレス (1971:52)。
- (4)Rouault et Suarès (1960:38), ルオーとシュアレス (1971:65)。
- (5)Rouault et Suarès (1960:39), ルオーとシュアレス (1971:66)。
- (6)マルセル・アルラン (1899 1986) は,小説家。 ルオーの後半生の友人である。高田博厚 (1900 - 87) は彫刻家。1931 - 58 年フランスに在住し,ル オーと直接の交流があった。柳宗玄 (1917 -)は, 『現代世界美術全集 ルオー』(1972)の編集,

『ルオー全版画』(1979) の翻訳, 『ルオー キリスト聖画集』(1987) などの仕事がある。

- (7)たとえばドリヴァル (1961) は、ルオーの芸術を擁護する際に彼個人の「天才的」資質を掘り下げようとするので、同時代人によるルオーへの影響は重視されていない。
- (8)注7の手紙を受信して約1ヶ月後、1913年3月3日のシュアレス宛の手紙に、ルオーはこう書いてはいる。「それから、親愛なシュアレス、あなたが「優しき言葉」をかけてくださった時、こなごなになった煉瓦の上に屈みこんでいた私が、いかにして廃墟より立ち直ったかご存知ですね」(Rouault et Suarès1960:42、ルオーとシュアレス 1972:70)。とはいえ、こうした「手紙の言葉」のみでは、ルオ

ーにとってシュアレスの言葉がいかなる程度に影響 を及ぼしたかについては、小さな傍証でしかないよ うに思われる。

(9)Rouault et Suarès (1960:38-39), ルオーと シュアレス (1971:65-66)。

(10)苦しみに耐える経験から、無力な人の理解者になる力が生じるとしても、その際生じるのはまず「善」であり、「善」なくして「美」の生成はありえないという理解も成り立つ。しかし、たとえ苦しみが契機になるとしても、人の「善」性はどうやって生じるのかという難問は残る。打撃を被る経験が、そのまま「善」性を生みはしないからだ。本稿はこの難問に答えられないが、それでも、「善」が生じるのは、実は他者からの「美」に打たれる経験があるからだと考えるための多少の論拠を述べることはできる。ハンナ・アーレントは以下のように指摘している。周知のとおりプラトンは『国家』において最高のイデアとして「善」を規定したが、プラトンの議論を吟味すると、美のイデアが善のイデアの上位を占めていることがわかる。善のイデアとは

「『光り輝く明るさ』のなかで人間の事柄の暗がりを照らす」(アーレント 1994:153)ものなのだが、この「輝くことで暗がりにある事柄を照らす」という性質そのものが、美の本質に由来するという。

「善」は政治哲学ないしは道徳哲学の伝統の用語となり,「美」はずっとのちになって美学の用語となったが,そもそも「善」の経験には「美」の経験が不可欠であったことを示唆するアーレントの見解は,重要な示唆を含んでいる。本稿で述べた美の定義,すなわち美とはそれみずから人に近づき,弱さや傷つきに寄り添うものという定義は,アーレントの議論に沿っていえば,そもそも美の本質に,善を生成

しうる契機が含まれるということである。しかし、 無力な人に備わる力を伝統的な「善」と同一視して いいかについては、なお多くの問題があると思われ る。

(11)高橋(2014)は、戦争・学生運動・いじめを、 三世代にわたって累積された「語る」ことの困難な 傷ついた時代経験として位置付けている。

参考文献

マルセル・アルラン(1971)「序文」『ルオー=シュアレス往復書簡』富永惣一・安藤玲子訳,河出書房新社

ハンナ・アーレント (1994)「権威とは何か」『過去と未来の間』引田隆也・齋藤純一訳,みすず書房

シモーヌ・ヴェイユ (1995) 『重力と恩寵』田辺保 訳, ちくま学芸文庫

岡真理(2000)『記憶/物語』岩波書店 河角恵子(2015)「受刑者ではなく、人としての営 みを尊重した社会復帰への取り組み」『性とここ ろ』vol.7, no.1, エム・シー・ミューズ

高田博厚(1965)『ルオー』みすず書房

高橋在也(2014)「人間にとっての〈語り〉の根源 性一年を重ねた者にとっての〈語り〉の場の生成」

『総合人間学』第8号

高橋哲哉(1995)『記憶のエチカ』岩波書店 ベルナール・ドリヴァル(1961)『ルオー』高階秀 爾訳,美術出版社

エーリッヒ・フロム(1991)『愛するということ』 鈴木晶訳,紀伊国屋書店

宮地尚子(2007)『環状島=トラウマの地政学』み すず書房 柳宗玄(1965)「ルオーの夜明け」『みずゑ』1965 年 11 月号,美術出版社

柳宗玄(1972)「ルオーの足跡」『現代世界美術全 集 ルオー』集英社

ジョルジュ・ルオーとアンドレ・シュアレス (197 1) 『ルオー=シュアレス往復書簡』 富永惣一・

安藤玲子訳, 河出書房新社

- B. Dorival(1956), *Cinq études sur Georges Rou*ault, Éditions universitaires, Paris
- E. Fromm(1956), *The Art of Loving*, Harper, Ne w York.
- G. Rouault et A. Suarès(1960), Correspondance, Gallimard, Paris.
- M. Arland(1960), Introduction, in Rouault et Su arès(1960), *Correspondance*, Gallimard, Paris.
- S. Weil(1947), *La Pesanteur et la Grâce*, Plon, Paris.

編集委員会査読済み

[たかはし ざいや/千葉大学 /社会教育学]